メッセージアウトライン
出エジプト記17:1~16
「アマレクとの戦い」

[1]「イスラエルの全会衆は、主の命によりシンの荒野を旅立ち、旅を続けてレフィディムに宿営した。しかし、そこには民の飲み水がなかった」
「レフィディム」…シナイ半島南部シナイ山の北西約20㎞の地と思われる。 ここにもやはり飲み水がなかった。
[2-4]「民はモーセと争い、『われわれに飲む水を与えよ』と言った。モーセは彼らに『「あなたがたはなぜ私と争うのか。なぜ主を試みるのか」と言った。民はそこで水に渇いた。それで民はモーセに不平を言った。『いったい、なぜ私たちをエジプトから連れ上ったのか。私や子どもたちや家畜を、渇きで死なせるためか。』そこで、モーセは主に叫んで言った。『私はこの民をどうすればよいのでしょう。今にも、彼らは私を石で打ち殺そうとしています。』」
　水に渇いたイスラエルの民は今度は石で打ち殺そうとするほどの勢いでモーセに詰め寄る。彼らはエジプトにいた時から何度も主なる神の力を経験し、水の分けられた紅海を歩いて渡り、後を追って入ったエジプト軍は元に戻った水で全滅し、またマラでもシンの荒野でも水や天からのパン（マナ）やうずらの肉が与えられた。それなのに彼らはまたここで不平不満を言っている。たしかに彼らは少しの間は主が水を与えてくださるという期待をもって待っていたであろう。しかし、自分たちの思うようなタイミングで必要なものが与えられないと、とたんに指導者モーセに向かって不平不満を言うのである。
　彼らに必要なものは不信仰ではなく、信仰を持ってなおも主を待ち望むことではなかったか。主は決して彼らが飢え死にしたり、渇きで死んでしまうことを望んではおられない。それなのに彼らはモーセと対立する。彼らが主なる神が立てられた指導者モーセと争うということは主を試みることなのである。
「試みる」には二つの種類がある。神が人を試みる場合と、人（この場合は特に信仰者）が神を試みる場合である。神が人を試みるのは主権者である神が、自由意志を持った人間の信仰と真実を知るためである。しかし、人は神を試みてはならない。なぜなら、そうすることは私たちが主また神と信じるお方の真実性を疑うことであり、それは重大な不信仰の道なのである。
聖書で神を試してみよと言われているのはただ一つ、すなわち神への十分の一のささげ物のみである。→マラキ3:10　それは祝福への道である。
モーセはこのレフィディムでの困難に直面した時、やはり主に向かって叫んだ。すなわち助けを祈り求めたのである。
[5-6]「主はモーセに言われた。『民の前を通り、イスラエルの長老たちを何人か連

れて、あなたがナイル川を打ったあの杖を手に取り、そして行け。さあ、わたしはそこ、ホレブの岩の上で、あなたの前に立つ。あなたはその岩を打て。岩から水が出て、民はそれを飲む。』モーセは長老たちの目の前で、そのとおりに行った」
「ホレブ」はモーセが羊飼いをしていた時にあの燃える柴の中からモーセに呼びかけられた場所で、モーセの人生において最初に主がご自身を現わされた場所である。イスラエルの民は今、その近くまで来ていたのである。主がそこの岩の上でモーセの前に立つとは、主の臨在を現わす雲の柱が動いて来て、その岩の上に立つということか。あるいは目には見えないけれども、たしかに主がそこにいてくださるということの強調か。詳しいことはわからない。そして主はモーセがその杖をもって岩を打つと。岩から水が出ると言われた。そしてイスラエルの民はその水を飲めるようになるのである。モーセが杖で岩を打つ。するとイスラエルの民全員の必要に答えるだけの大量の水がそこから出る。これはどう考えてもありえない。しかし、実際にそのとおりになったのである。岩を杖で叩けば音は出るが水は出ないであろう。岩が水を入れたプールのようになっていて、杖で打つことによって、それに穴が開いて水が出て来たということであろうか。しかし、これはあまりにも合理的な考えである。約二百万人はいたであろうイスラエルの民、そして多くの家畜を十分養うだけの水は一度に流れ出てしまってはだめで、泉のように絶えず湧き出している必要がある。それゆえこの出来事は紅海の水が分かれたのと同じような主なる神のみが行うことのできる奇跡なのである。
[7]「それで、彼はその場所をマサ、またメリバと名づけた。それは、イスラエルの子らが争ったからであり、また彼らが『主は私たちの中におられるのか、おられないのか』と言って、主を試みたからである」
「マサ」…「試み」という意味。民が主を試みた。「メリバ」…「争い」という意味。民がモーセと争った。 モーセがこのように名付けたことによって、この場所はイスラエル人の不信仰を末長く指し示す場所となったのである。しかし、この場所でもう一つの大事件が起こった。それは外敵との初めての戦いである。
[8]「さて、アマレクが来て、レフィディムでイスラエルと戦った」
このシナイ半島の北部には好戦的な遊牧民のアマレク人が住んでいた。アマレクとは創世記36:12を見ると、イスラエル人の祖先ヤコブの兄であったエサウの孫にあたる人物であることが分かる。ヤコブの子孫がイスラエル人となったように、このアマレクの子孫がアマレク人となったと考えられる。あるいはもっと古く、アブラハムの時代、創世記14:7にアマレク人という名が出てきているのでこの民と関係があるかもしれない。しかし、聖書学者によれば、モーセが後代の読者にアマレク人が住んでいた地域を理解させるためにこの名を用いたという説もある。いずれにしても彼らは自分たちの領土と考えていたシナイの地にエジプトから大群衆が入ってきたことを知って脅威を感じたのであろう。彼らにはシナイ半島にはイスラエルの民を養

うだけの食料も水もないことをよく知っており、それで、荒野の長旅に弱り疲れていると思われるこの侵入者たちに対して略奪のために攻撃を仕掛けたのである。彼らの攻撃の方法は申命記25:18によれば、イスラエルの民が疲れて弱っている時に、特に弱いうしろの落伍者たちを襲うというものであった。イスラエルの民の列は長く伸びていたであろう。その疲れ切った最後尾の人々を彼らは狙ったのである。彼らはイスラエルが神に選ばれた民であることを認めず、その神を恐れることもなかった。イスラエルの民が出エジプトの時になされた主なる神の偉大なわざのニュースも伝わっていたであろうが、そんなことにはおかまいなく彼らは襲い掛かったのである。
[9]「モーセはヨシュアに言った。『男たちを選び、出て行ってアマレクと戦いなさい。私は明日、神の杖を手に持って、丘の頂に立ちます。』」
　この戦いのためにモーセはイスラエル軍の長としてヨシュアを選んだ。ここがヨシュアの名前が初めて出て来る箇所である。「ヨシュア」とは「ヤハウェ(神)は救い」を意味する名。彼はエフライム部族のかしらであった。→民数記13:8　イスラエル人は長い間エジプトで奴隷として過ごしてきたので戦うことはこれが初めてであっただろう。しかし、敵のアマレクはすでに攻撃して来ている。待ったなしである。モーセはヨシュアに戦いのために必要な人数を選び、出て行ってアマレクと戦うように命じる。今までモーセは困難に直面した時、主に向かって叫んだ。つまり助けを祈り求めた。そして、あの紅海を渡る時には主がエジプトの軍隊に対して直接戦われた。しかし今回はモーセはヨシュアに戦いの準備をするように命じた。
　私たちの信仰生活においても、神がすべてをなしてくださる場合と、神により頼みつつも、私たちが進んで困難と戦わなければならない場合がある。そしてこのアマレクとの戦いの場合は後者なのである。ただし、モーセは、あなたに任せたからあとは自分は知らないとは言わないで、「私は明日、神の杖を持って、丘の頂に立つ」とヨシュアに言った。これは高みの見物をするためではなく、戦いの勝利のために神にとりなしの祈りをするということである。
[10-11]「ヨシュアはモーセが言ったとおりにして、アマレクと戦った。モーセとアロンとフルは丘の頂に登った。モーセが手を高くあげているときは、イスラエルが優勢になり、手を下ろすとアマレクが優勢になった」
　ヨシュアはモーセに対する服従の精神と主に対する確固とした信仰を持っていた。イスラエル人は武器らしい武器を持っていなかったであろうが、それでも勇敢にアマレク人と戦ったのである。やがてこのヨシュアはモーセの後を継いでカナンの地に入る時の指導者となる人物であった。
「フル」はイスラエルの長老の一人であったと思われる。またモーセとアロンの姉ミリアムの夫であったという説もあるが詳しくはわからない。
　モーセは手をあげて祈った。その手には神の杖がしっかりと握られていた。この神の杖はエジプトにさばきをもたらし、イスラエルをエジプトの手から救ったことのシ

ンボルであった。この杖を天に向けて高く上げるということは、神が自分たちについておられるということを、戦っているイスラエル人に十分自覚させるものであっただろう。モーセはイスラエルの民に対して主なる神の旗印を高く掲げているのである。モーセはこのようにして神からの力がイスラエルの兵士たちに与えられることを祈り願った。彼が手をあげて祈っているときはイスラエルが優勢になったが、疲れて手を下ろしている時、すなわち祈りを止めているときはアマレクが優勢になったのである。

[12-13]「モーセの手が重くなると、彼らは石を取り、それをモーセの足元に置いた。モーセはその上に腰かけ、アロンとフルは、一人はこちらから、一人はあちらから、モーセの手を支えた。それで彼の両手は日が沈むまで、しっかり上げられていた。ヨシュアは、アマレクとその民を剣の刃で打ち破った」

モーセはこの時八十歳である。杖を持った手を上げて祈る姿勢を続けることは体力的にかなり厳しかったであろう。そこでアロンとフルは石を持って来てそれにモーセを腰掛けさせ、彼らはそれぞれモーセの手を一本ずつ支えたのである。それでモーセの手は日が沈むまで、しっかりそのままであった。

しばしばじっとしているように見える祈りの奉仕においても、全身全霊を打ち込んで祈る場合、活動的な働きをするよりも体力も精神力も消耗することがある。私たちも信仰生活の様々な場面においてそのような祈りをもって神に迫りたい。そしてそのような祈りにおいて疲れる時、同じ信仰者、兄弟姉妹たちの助けを受けることも必要なのである。自分一人で孤軍奮闘するだけでなく、志を同じくする祈りの友に支えられるならば、私たちは神の国を大きく揺り動かすことができるであろう。

そして、ついにそのようにしてモーセが祈りを続けるうちに、ヨシュアの軍はアマレク人を打ち破ることができたのである。

[14]「主はモーセに言われた。『このことを記録として文書に書き記し、ヨシュアに読んで聞かせよ。わたしはアマレクの記憶を天の下から完全に消し去る』」

これは聖書とイスラエル人に関する公的な記録の最初の記述である。エジプトで高い教育を受けていたモーセはこれ以後も、シナイの旅を続ける間、様々な記録を書き続けていったことであろう。聖書の最初の五巻、創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記はモーセが書き、後に「モーセ五書」と呼ばれるようになった。この戦いで主は「アマレクの記憶を天の下から完全に消し去る」と言われたほどアマレク人は徹底的にイスラエル軍によって打ち破られた。

しかし、後の歴史を見るとアマレクは地上から消滅したのではなく、少数になっても活動していたことが分かる。→Ⅰサムエル30:1~2、Ⅱサムエル1:8, 13

[15-16]「モーセは祭壇を築き、それをアドナイ・ニシと呼び、そして言った。『主の御座の上にある手。主は代々にわたりアマレクと戦われる。』」

「アドナイ・ニシ」…「主はわが旗」という意味。これはモーセが神の杖を旗印として

掲げて祈ったところからこのように呼んだのであろう。この祭壇はイスラエルの勝利の記念となり、証しとなるものであった。これは自然石を積んで作ったものであろう。
「主の御座の上にある手」…これはいろいろな解釈があるが、主の御座に向かって手を上げる、つまり、「とりなしの祈り」を象徴するものと考えられる。
「主は代々にわたってアマレクと戦われる」…モーセをはじめ神の民のとりなしの祈りによって、主は代々にわたって戦われ、ついにアマレクは完全に滅ぼされてしまうという未来を見据えたことばであろう。
　私たちも、数々の主のすばらしいみわざを見ながら、ちょっと苦しいことがあると、すぐに不信仰に逆戻りするような者になるのではなく、アマレクとの戦いに全身全霊をもってとりなしの祈りに打ち込んだモーセ、そしてそれを両脇で支えたアロンとフルのように教会の前進と神の御栄光のために協力し、熱心に祈り続け、またヨシュアのように日々の信仰の戦いを戦い抜く者となっていきたい。→エペソ6:13～20